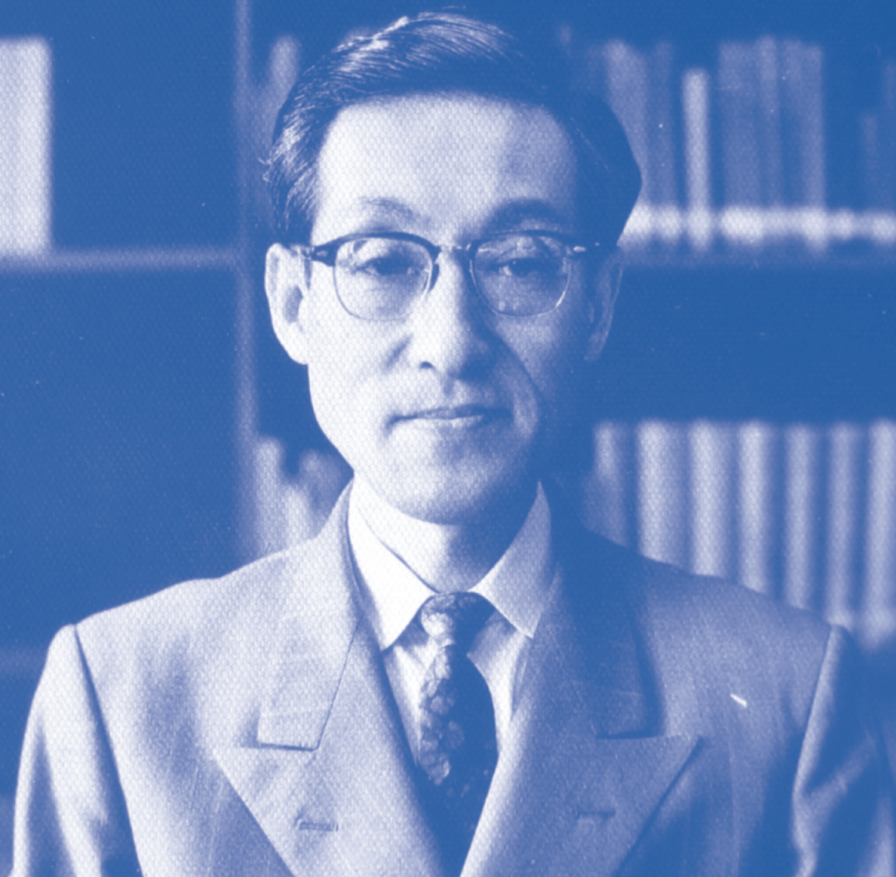


蛭沼寿雄著作選集

全3巻



新約聖書の本文学研究に
偉大な足跡を残した碩学の
エッセンスを精選

新教出版社

(1) マルコ 1:1

マルコ福音書の冒頭「イエス・キリストの福音の初め」は、本文が次の四種類に相違している。

- (1) 「イエス・キリスト」 \aleph^* Θ 28^e syr^{pal} geo¹ Ir (gr, lat $\frac{1}{2}$) Or (gr, lat)
Vict Serap Tit Bas Cyr-Hier Epiph Hier
- (2) 「イエス」 28^{*}
- (3a) 「神(冠詞なし)の子イエス・キリスト」 \aleph^a B D L W it vg syr^{p,h} sa
bo arm geo² Tat Ir (lat $\frac{2}{3}$) Or (lat) Aug
- (3b) 「神(冠詞あり)の子イエス・キリスト」 A K Δ II fam.1 fam.13 33
565 700 892 *etc.* Lect Cyr-Alex
- (4) 「主の子イエス・キリスト」 1241

以上の内、(2)の「キリスト」を省略した「イエス」のみのものは、証拠が一つだけであり、(4)の「主の子」は「神の子」の書きかえと考えられるから、結局、(1)と(3)、すなわち、「神の子」が無いか有るかの二つの場合が問題となる。

写本証拠の上からは、「神の子」を有するのは、「神」に冠詞のないものは、 \aleph^a B L 等のアレクサンドリア型(A)、D it vg 等の西方型(W)、「神」に冠詞のあるものは、 Δ 33 892 等のアレクサンドリア型(A)、fam.1 fam.13 565 700 等のカイサリア型(C)、A K II 小文字写本のビュザンティオン型(B)の支持があり、有力である。しかも、「神の子」という概念は、マルコ福音書のキリスト論とも一致し、(3)を主張する根拠とされる。かかる理由より、RSV NEBはこれを探り、TGNT(聖書協会版)は角括弧つきで本文の中に入れていた(確度はC)。

しかしながら、「神の子」を欠く証拠も、シナイ写本のもとの読み方を始め(第一校訂で「神の子」を加えている、A)、 Θ 28 syr^{pal} geo Cyr-Hier (C) 等の支持がある(古代訳も教父の引用も双方に分れている)。しかも、イエスは「神の子」であるというマルコ福音書のキリスト論が、後に冒頭に添加されたとも考えられる(「神の子」が後に省略されたと見る考え方は、この箇所でも語が同一の終りを持っているための省略、すなわち、homoeoteleuton と見る)。ホルトは「省略形は恐らくアレクサンドリア型で、非常に古いものであることは確かである。概して、その方が採択されるに値すると思われる」(Hort, 'Appendix', 23)として、(1)を採っている。ネストレもキルパトリックの「ダイグロット」も同様である。しかし、ホルトは「どちらの読み方も斥けることはできないというのが間違いのない所である」(同所)と述べ、決断を躊躇している。文書の初めと終りは、しばしば損傷や加筆がある。総合的に判断して、「神の子」を欠く異文、すなわち、(1)の方が適切な度合いが少々大きいと思われる。

(Hort, 'Appendix', 23; Taylor, *Text*, 82; Tasker, 413.)

類書のない貴重な労作

荒井 献 ◆東京大学・恵泉女学園大学名誉教授



我が国の聖書学、とりわけ新約聖書学が夙に国際的水準に達していることは、斯界では周知の事実である。これを新約本文学の分野で達成せしめた、ただ一人の先駆者が蛭沼寿雄先生である。この度、昨年その第III巻が完結出版された『新約本文のパピルス』に引き続き、先生の「著作選集」全3巻が、先生の学統に連なる辻学、嶺重淑、前川裕、山本伸也4氏の「解題」付きで公刊の運びとなったことに、心からの祝意と敬意を表わしたい。

筆者自身、新約本文研究分野では蛭沼先生が（間接的にはあるが）我が国では唯一の師であった。すなわち、先生が過去25年間（1966-1991年）執筆・刊行されていた雑誌『新約研究』（*Studia Textus Novi Testamenti*）を、筆者は第1号から最終第300号に至るまで先生ご自身から寄贈されており、本文研究に関する限り、筆者はこの研究誌を介して先生に多大の学恩がある。

この度公刊予定の「著作選集」全3巻は上記研究誌の中から編集された。これには（自省を込めて言うが）現在に至るまで日本人の著書としては類書がないだけに、新約聖書の「読み」に関心のある方々に本著作選集の購読を衷心から勧めたい。

本著作選集を推す

山内一郎 ◆元関西学院院長



蛭沼寿雄先生は、1946年に関西学院に赴任され、82年に定年退職されるまでの36年間、主として大学文学部で言語学、古典語関係の講義を担当されたが、先生が生涯を懸けて打ち込まれた新約テキストの研究成果は、『新約聖書の成立』（1950）に始まり、昨年完結出版された『新約本文のパピルス』（遺稿を含む全3巻）に至る数多くの著書に結実している。

新約の本文研究は、夥しい数の写本が示す異読を比較検討し、失われた原本の「読み」を可能な限り再構成するという極めて周到緻密な文献学的作業である。蛭沼先生は、東大時代に師事された神田盾夫、無教会丸の内集会で出会われた塚本虎二両氏の厳しい感化を受け、客観的なテキスト分析の徹底を企図されたが、そこには信仰と学問の二元論的アポリアの克服を志向する高次の探求的姿勢が看取される。

今般、蛭沼先生が主筆として毎号執筆された『新約研究』誌（1961-91、総2500頁）から精選された重要かつ貴重な研究業績が『著作選集』3巻に纏められ、新教出版社から刊行される意義はまことに大きく、広く国内外の新約学徒にお勧めしたい。

ギリシア語新約聖書を読む醍醐味の一つは、様々な写本の読みを比較することである。本著作選集に収められた「本文学演習」は、複雑な写本情報を比較検討する校合（=きょうごう）作業がいかなるものかを、実際に示してくれる（左に掲載の本文見本を参照）。

読者はあたかも教室にいるかのようにしてその実例を学びながら、「本文」とは何であるかを自ずから体得し、聖書への理解を深めていくことだろう。

● 著作選集の刊行に当たって

故蛭沼氏の新約本文学関係の著書から、聖書学に携わる専門家や、説教のために釈義を行う人々、また新約聖書をギリシア語原典で学ぼうと志す人々にとって、今日なお有益な教示に富む作品を、全3巻の「著作選集」として復刻刊行する。

蛭沼寿雄（ひるぬま・としお／1914-2001）

大阪に生まれ、北野中学、大阪高校を経て東京帝国大学卒業（専攻は言語学）。1949年より1982年まで関西学院大学文学部で教えた。この間、ハーバード大学留学。文学博士。言語学も含めたその業績は膨大で多岐に渡るが、新約聖書の本文研究では我が国の第一人者であった。著書『新約本文のパピルス』（全3巻）他多数。C. S. ルイス紹介の先駆けでもあり、ルイス『悪魔の手紙』、『四つの愛』の翻訳がある。

【著作選集全3巻の構成】 各巻とも税込定価 4410 円（本体 4200 円）／A 5 判上製

第1巻 新約本文学演習マルコ・マタイ 解題=辻 学

第2巻 新約本文学演習ルカ I、ギリシア語新約語法 解題=嶺重 淑、山本伸也

第3巻 新約本文学史 解題=前川 裕

■ 蛭沼寿雄著作選集刊行委員会

井上琢智（関西学院大学学長・経済学部教授）
山本伸也（関西学院大学教育学部教授）
嶺重 淑（関西学院大学人間福祉学部准教授）

辻 学（広島大学大学院総合科学研究科教授）
前川 裕（同志社大学非常勤講師）
池田裕子（関西学院学院史編集部副主査）

発行所：新教出版社 新宿区新小川町9-1 Tel: 03-3260-6148 / Fax: 3260-6198

本のなまえ	冊数	お取り扱い書店
蛭沼寿雄著作選集 第1巻 2011年7月刊		
蛭沼寿雄著作選集 第2巻 2011年8月刊		
蛭沼寿雄著作選集 第3巻 2011年9月刊		
お客様のお名前・ご連絡先		